

# 令和2年度 アスリートセンター安全講習会実施報告

— 各指定強化部の取り組みについて —

守屋 志保\*・末永 尚\*\*・星川 精豪\*\*\*

## 1. 背景

2015年に江戸川大学ではアスリートセンターが発足し、①クラブ活動を通して、より豊かな人間性を備えた学生を育成する。②競技と勉学をより高いステージで両立させることにより、一般学生の模範となる学生を育成する。③各競技における技術の向上を図り、日本一を目指し、競技力の向上をもって本学のブランド力を高める。の3つの使命を掲げ<sup>1)</sup>、強化部に指定されているクラブ活動である、フットボールクラブ、男子バスケットボール部、女子バスケットボール部、女子バレーボール部を統括している。

そんな中、Coronavirus disease 2019(新型コロナウイルス感染症、以下COVID-19)が世界的な猛威を見せ、2020年度においては感染予防のために、学業、及びクラブ活動が大きく制限されてきた。クラブ活動に目を向けると、キャンパス入構制限による活動の中止、各競技大会の相次ぐ中止等により、クラブ活動を通じた育成は難しい状況が続いている。

本学においては各強化部が感染予防マニュアルを大学に提出し、6月より徐々にキャンパス内に

おけるクラブ活動の制限が解除された。それによりそれぞれの競技における段階的な活動再開のロードマップに従い、部活動を再開してきた。

長期不活動による身体への影響に目を向けると、ロックアウト後におけるアメリカンフットボール選手のアキレス腱断裂の増加<sup>1)</sup>や男子バスケットボール選手の前十字靭帯断裂や傷害数の増加<sup>2)</sup>など多々の報告があり、クラブ活動再開時は注意を要する。また8~12週間の不活動により筋力が7~12%低下した、5週間のトレーニング中断で持久力が24%低下したとの報告もあり<sup>3)</sup>、COVID-19はパフォーマンスにも大きな影響を与えかねない。

それらを鑑みて2020年度における第1回目の安全講習会は、COVID-19の感染予防に留意しつつ健全なクラブ活動を行うために、①COVID-19、②熱中症、③救急処置、についての基礎知識を得る事を目的として行われた。また感染予防のために今回の安全講習会は全強化部が一同に参加した形ではなく、強化部毎にアスレティックトレーナーが中心となり開催された。

## 2. 第1回安全講習会(各強化部の内容)

### 2-1 男子バスケットボール部

7月23日に講義、加えて8月1日に実演と、計2日間に分けて行った。また感染予防対策として、7月23日の講義は全スタッフ、全部員を対象としてオンライン形式で行ったが、対面式によ

2020年11月30日受付

\* 江戸川大学メディアコミュニケーション学部こどもコミュニケーション学科教授 スポーツ科学、スポーツ心理学

\*\* 江戸川大学社会学部現代社会学科講師 スポーツ社会学、スポーツ・健康科学

\*\*\* 江戸川大学社会学部経営社会学科非常勤講師 スポーツ医学

る実演はAチーム、Bチーム、Cチームのそれぞれのチームの練習前に行った。参加者は部員76名であり、内訳はAチーム20名、Bチーム25名、Cチーム27名、学生スタッフ4名であった（他外部スタッフ4名参加）。また7月23日に就職活動により欠席した学生に対しては個別に対応した。講習会は2日間とも男子バスケットボール部アスレティックトレーナーの星川精豪氏が担当した。以下表1に演題を示す。

表1 第1回安全講習会 男子バスケットボール部演題

演題①	COVID-19について ～長期不活動による人体への影響、および部員として遵守する事～
演題②	熱中症について ～COVID-19との関係、熱中症対応フローの確認～
演題③	救急救命について ～救急救命の流れ、学内AED設置場所の確認～
演題④	AEDの使用法 ～救急救命の流れの確認、AEDの使用法の確認～

**演題①：COVID-19について**

はじめに長期不活動による人体への影響について話があった。同じバスケットボールであるNBAにおける2011-2012シーズンのロックアウトの影響や<sup>2)</sup>、NFLにおけるロックアウト後のアキレス腱断裂者数の急増を例にあげ<sup>1)</sup>、今後クラブ活動における練習強度を高めていった場合起こり得る事を確認した。また国際オリンピック委員会（International Olympic Committee）によると、過去4週間の負荷の平均に対し、これからの1週間の負荷の平均が1.5倍以上になると傷害が急増すると報告されており<sup>4)</sup>、それらを踏まえ再度クラブ活動再開のロードマップの見直しを行い全体で確認した。以下図1に男子バスケットボール部における活動再開のロードマップを示す。

その後COVID-19の感染が疑われる症状、日本バスケットボール協会における感染対策方針、ONE TAP SPORTS（株式会社ユーフォリアが



図1 男子バスケットボール部における活動再開のロードマップ

開発・提供している簡易的な体調チェック機能)の入力徹底について確認し、演題①を終えた。

**演題②：熱中症について**

はじめに過去の報告を例に挙げ、COVID-19の影響からクラブ活動を再開し、練習強度が上がり始める7月下旬に熱中症の発生件数が最も多い事を確認した。その後熱中症の症状について確認すると共に、熱中症が発生した場合の対応フローの確認を行った。

**演題③：救急救命について**

はじめに国際救急救命協会、および日本赤十字社の資料を参考にし、心臓が停止してからの救命の可能性、救急救命の流れの確認を行った。その後意識の確認、心停止の判断、気道確保、胸骨圧迫、人工呼吸と、実際の流れに沿ってそれぞれの方法を確認した。その後江戸川大学駒木キャンパス内のAED設置場所を確認した。以下図2に江戸川大学駒木キャンパス内のAED設置場所を示す。



図2 江戸川大学駒木キャンパス内AED設置場所（地図改変）

#### 演題④：AEDの使用方法

Aチーム、Bチーム、Cチームと、全チーム練習のあった8月1日に、感染予防に留意し各チーム練習前にAEDの使用方法を実演して説明した。はじめに7月23日に説明した救急救命の流れについて再度確認し、その後人が倒れた時、もしくは傷病者を発見した場合の対応を説明した。意識の確認方法や体位変換は実際にパートナー同士で体験してもらった。その後第二体育館に設置されてあるAEDの使用方法を実際に見てもらい確認した。以下に当日の様子を示す。



全ての演題内容終了後に、講習会に関するアンケート調査を実施し、2日間に渡った男子バスケットボール部における安全講習会を終了した。

#### 2-2 女子バスケットボール部

感染予防の観点から密閉、密集、密接の三密を防ぐ理由から、オンライン形式での実施をメインとして行い、時間の調整の難しい場合のみ対面式での実施をした。オンライン形式実施日は7月16、17、18日、対面形式実施日は7月22日であった。参加者は7月16日7名、7月17日4名、7月18日10名、7月22日4名の、計24名だった。

江戸川大学女子バスケットボール部における部員の安全と各自の危機管理を目的に、緊急時の対応について部員自身が理解を深め、自ら行動ができる事を念頭に指導を行い、いざ安全が脅かされる事態になったとしても落ち着いた行動を取る事が出来る様に指導を行った。以下表2に演題を示す。

表2 第1回安全講習会 女子バスケットボール部演題

演題①	AEDの使用方法に関して ～使用時の注意点、女子バスケットボール部の取り組みとして～
演題②	熱中症への対策 ～水分補給、セルフチェック、女子バスケットボール部として～
演題③	新型コロナウイルス感染症感染拡大防止策 ～新型コロナウイルスについて、女子バスケットボール部として～
演題④	女性アスリートへのサポート ～月経についてとその問題、女子バスケットボール部の取り組み～

各項目は、江戸川大学女子バスケットボール部でのスポーツ活動での事故やケガを考慮し、個人個人が危機管理を行い、自覚も持つ事で予防が可能な事と、救急対応が必要な場面で部員全員が対応に当たることが出来るようにと考え決定した。また新型コロナウイルス感染症に対して、選手個人、部活動の安全のための感染予防対策、部員内での感染が確認された場合の対応、安全に部活動

を行うために各自が理解して取り組むために上記の内容を選んだ。加えて女子バスケットボール部は部員が女性であることから、生理的に月経がある事と、月経の影響により起こる症状、トラブルを理解し、適切であり早急な対応をする事で安全にスポーツ活動に取り組む事が出来るとの考えから、月経についても実施した。

#### 演題①：AEDの使用方法に関して

はじめにAEDの基礎知識を確認した後に、使用方法や使用時の注意点を重要な事を中心に確認した。その後学内のAED設置場所を、マップを提示して確認した。

女子バスケットボール部として、部員が緊急時の正しいAEDの使用方法、注意点、設置場所を理解する事で、実際に使用する場面が来た時に焦らず正しい判断が出来る様にする、また早急な対応が行えるように考慮しながら実施された。

#### 演題②：熱中症への対策

はじめに熱中症の基礎知識を確認し、その後水分補給の方法、予防のためのセルフチェックの方法を確認した。体重の約2%の脱水はパフォーマンスの低下につながり、人体に影響を及ぼす指標と言われている。また体重の約3%以上の脱水に至っては、命の危険を伴う可能性があり、練習前後の体重測定の重要性を改めて確認した。

簡易的な脱水症状のセルフチェックとして、尿の色の確認がある。尿の色のチェックは練習前後で行い、練習前に比べ練習後にどのくらいの変化があるのかチェックする事で、水分量は足りているかを判断し、脱水症状を防ぐ事が出来る。また熱中症と疑われる症状が見受けられた場合の対応についても確認した。

女子バスケットボール部の熱中症対策として、個人が予防策を行う事、熱中症の症状がある部員に対して他の部員が行う事の2つの観点から講習を実施した。個人が予防策として行う事としては、飲水の量、内容、時間、尿の色などのセルフチェック、チームとしては熱中症の対処、対策に関して共通の認識を持つ事で、緊急時に早急に連

携して対応する事が出来るように実施した。

#### 演題③：

##### 新型コロナウイルス感染症感染拡大防止策

はじめに基礎知識として感染症とは何かと言う話があり、新型コロナウイルスがどの様な感染症であるか、感染経路、症状やその対応などを確認した。

また女子バスケットボール部の取り組みとして、①ONE TAP SPORTSでの体調チェック(体温、咳・くしゃみ、体のだるさ、喉の状態、嗅覚味覚、家族及び同居人の発熱、及び気になる症状)の徹底、②体育館の入館、食事前、練習の途中での手洗いなど感染に関する行動を注意する、③供用備品の使用禁止、④活動時期によっては着替え場所の分散(4、6、7月中)、⑤活動時期によっては練習時間の分散、短縮(4、6、7月中)、⑥体育館前のアルコール、体温計の設置、⑦学内でのマスクの着用、⑧感染が疑われる場合の対応について、⑨感染予防としての行動指針の作成、実施、が挙げられ、それぞれについて説明がなされた。

#### 演題④：女性アスリートへのサポート

年齢や症状により月経もしくは女性特有の問題は様々であるため、はじめに月経についての基礎知識を確認し、月経不順により起こる問題、またその症状について話があった。問題として、将来的な不妊や婦人科系の疾患の罹患率、骨粗鬆症、疲労骨折、慢性的な貧血を含む内科的疾患や、競技面では、月経による症状で本来のパフォーマンスが発揮出来ないなどが挙げられ、月経不順は軽視せず病院受診が必要なケースもある事を確認した。

女子バスケットボール部の取り組みとして、①女性特有の問題に対して、相談しやすい環境づくり、②部員、男性スタッフ共に月経に対する正しい知識、理解し共通認識を持つ事で、より良いコンディショニングにつなげていく、③月経周期の把握をする事で、生理不順や月経の症状が重い選手とは相談、病院への受診も検討する事、④試合

時の鎮痛剤の使用状況の把握（医療機関受診の選手対象）、⑤基礎体温計で検温を行い、自身の身体の状態を知る事、が挙げられ、それぞれについて説明がなされた。

全ての演題内容終了後に、講習会に関するアンケート調査を実施し、感染予防のために人数を分散し数日間に渡り行われた女子バスケットボール部における安全講習会を終了した。

### 2-3 フットボールクラブ

感染予防に留意し、対象者である全部員を3グループに分け、対面式で行った。実施日は7月28日A・Cチーム、7月29日B・Dチーム、7月30日E・Fチームであった。3日間全ての講習会は、チーフアスレティックトレーナーである阿久井陽輔氏が中心となり開催された。以下表3に演題を示す。

表3 第1回安全講習会 フットボールクラブ演題

演題①	AEDの使い方 ～リトルアン・AEDトレーナーを使用し実技形式で使い方の復習～
演題②	熱中症対策 ～現場で出来る予防対策、プレクーリング、水分補給～
演題③	新型コロナウイルス感染予防対策 ～ONE TAP SPORTSについて、練習場での対策～

#### 演題①：AEDの使い方

はじめに学内AED設置場所の確認をした。江戸川大学駒木キャンパス内フットボールクラブグラウンドからは、L棟1階学生食堂入口の他、G棟である江戸川学園おおたかの森専門学校管理棟も近いので、大学内に加えて確認があった。また心肺停止、呼吸停止に対する1次救命処置の事をBLS（Basic life support）と言うが、その手順であるBLSアルゴリズムについて復讐を行った。そのAEDの使い方について確認し、実際に実技を行った。以下に当日の様子を示す。



#### 演題②：熱中症対策

はじめに熱中症フローチャートで、熱中症が疑われる症状があった場合の対応の流れを確認した。その後予防対策として、プレクーリング、水分補給の話があった。プレクーリングは、試合や練習前に体の内部を冷やして深部体温を下げる事を目的として行われるが、その簡易的な方法として手掌冷却について紹介があった。手掌冷却とは掌を冷水に5分程度入れて行われるが、パフォーマンスの維持、熱中症予防に効果的であると言われている。また別の方法としてアイススララーも紹介された。図3に示す通り、アイススララーを摂取した事により効果的に深部体温の1つの指標である直腸温の上昇が優位に抑制されたと言う報告もあり<sup>5)</sup>、暑熱下のSPORTSにおけるパフォーマンスに良い影響があると考えられる。

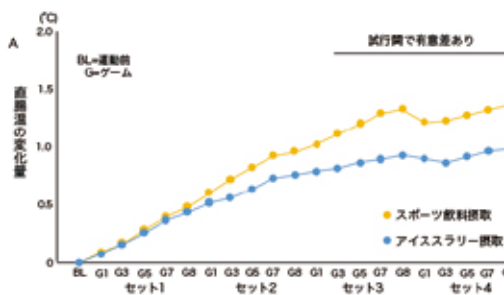


図3 テニス競技をシミュレートした運動中の直腸温の変化量

その後水分補給について話があり、体内の水分量の確認方法として、尿の色と練習前後の体重測定の重要性について確認した。また熱中症になっ

てしまった時の対応については深部体温をすぐに下げられるアイスバスの効果，経口補水液について話があった。

### 演題③：新型コロナウイルス感染予防対策

はじめに感染者増加のため再度感染予防対策を徹底するよう話があり，その目的について再確認した。またフットボールクラブとしての練習参加条件について話があり，フットボールクラブではONE TAP SPORTSにおけるコンディション管理を徹底する事を再確認した。その後練習場到着後からピッチ内に入るまでの流れの確認を行い，検温，更衣，手洗い・うがい・アルコール消毒と，それぞれについての説明があった。加えてボトルの使い回し飲み禁止，ビブスの共有禁止，ハイタッチ禁止など，ピッチ内での注意点や水分補給について再度確認がされた。

全ての演題内容終了後に，講習会に関するアンケート調査を実施した。最後に良い選手として才能よりも自己管理がしっかり出来る選手になってもらいたい，プロではなく学業やアルバイトをしている学生はプロ以上に考えてもらいたいと阿久井氏から選手達へ伝えられ，講習会を終えた。

## 2-4 女子バレーボール部

感染予防に留意し，対象者である全部員を2グループに分け，対面式で行った。参加者は7月13日13名，7月10日12名の計25名であった。2日間全ての講習会は，トレーナーである高津久美氏が中心となり開催された。以下表4に演題を示す。

表4 第1回安全講習会 女子バレーボール部演題

演題①	新型コロナウイルス感染予防について ～日々の体調管理，部員として遵守すべき行動～
演題②	熱中症について ～概論，対処方法～
演題③	救急救命について ～応急手当の必要性，心肺蘇生法，AEDの使い方～

### 演題①：新型コロナウイルス感染予防について

先に提出したガイドラインを基に，日々の体調管理，部員として遵守すべき行動について講義が行われた。女子バレーボール部では防止策としての行動を，自宅～本学，本学での練習，練習後の3つに分けて基本動作の徹底に努めており，再度その確認がされた。

自宅～本学では，検温，発熱・咳や喉の違和感の確認，マスク着用の奨励，顔を触らない事，登校直後の手指消毒についての説明がなされた。本学での練習では，汗の処理（顔に触れない），タオル・飲料ボトルの共有禁止，ハイタッチ・握手の禁止，練習後私物に触る前の手洗いの徹底，クリーナーによるボールの拭き取りについて説明がなされた。また練習後は，飲食店への立ち寄り禁止，マスク着用の奨励，顔に触れない，帰宅直後の手洗い，就寝前の検温について説明がなされた。

最後に伊藤アドバイザー，丸山監督を中心に，現在の状況下で指定強化部に活動が許される事の意味について話があり，学生の自覚を促し演題①を終えた。

### 演題②：熱中症について

はじめに熱中症の概論（分類と原因，症状）について講義があり，その後対処方法について確認した。熱中症とは暑熱障害の事であるが，症状により熱失神，熱疲労，熱痙攣，熱射病に分けられ，それぞれの本体，原因，症状について話があった。特に熱射病は体温が異常に上昇する事により中枢神経が障害される状態であり命に関わるため，いかに軽度のうちに気付く事が重要であることを確認した。

意識する事として，暑熱順化がされているか，スポーツドリンクや水分だけを摂っていないか，塩分と一緒に摂取するように心がけているか（OS-1，経口補水パウダー，梅干し等）が挙げられた。また暑さを感じてきたらその対応として，とにかく体温を下げる事（掌や顔を冷やす），体内から冷やす事（冷たいドリンク，アイスラリーの活用）が挙げられたが，急激な内臓の冷え

は下痢に繋がり、他栄養の摂取も制限されてしまうため注意が必要である事を確認した。

### 演題③：救急救命について

応急手当の必要性および心肺蘇生法、AEDの使い方について講義を行い、フローチャートに沿った実際の流れについてVTRを用いて展示を行った。また学内のAED設置場所の確認も行った。はじめに応急手当の目的について話があった。救急車が到着するまでに何も処置を行わなかった場合、救命の可能性は極端に減少するため<sup>6)</sup>、そのような場面に居合わせた部員が救命処置のサポートが出来る事はとても重要と考えられる(図4)。

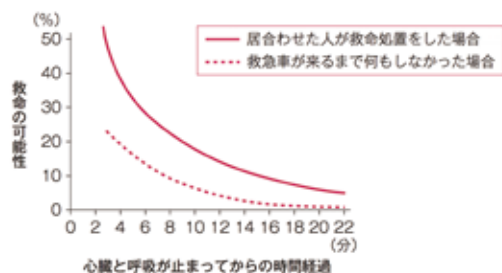


図4 救命曲線

そのため動画や実演を交えながら心肺蘇生法の手順やAEDの使い方について確認した。全ての演題内容終了後に、講習会に関するアンケート調査を実施し、女子バレーボール部における安全講習会を終了した。

### 2-5 強化部共通の感染予防対策として

今回のCOVID-19禍に置いて、全ての強化部で株式会社ユーフォリア様が開発・提供しているONE TAP SPORTSを利用し、簡易的に体調チェックを行っていた。江戸川大学も加盟している、大学スポーツ協会 (UNIVAS) の加盟大学の運動部所属学生の体調管理に関して、2020年12月末まで無償支援が実施されている。チェックできる項目は①体温、②倦怠感の有無、③咳の有無、④喉の違和感、⑤嗅覚・味覚の異常、⑥家

族、同居する人の発熱やその他症状である。ONE TAP SPORTSの活用により毎日の健康観察、クラブ活動参加の可否判断がスムーズに行えた。以下図5に指導者が閲覧出来る、ONE TAP SPORTSの確認画面を示す。

図5 ONE TAP SPORTS：コンディション当日レポート (男子バスケットボール部の例)

### 2-6 アンケート調査の結果と考察

安全講習会の終了後、参加者全員にGoogle formにてアンケート調査を実施した。

アンケート回答者は、211名(フットボールクラブ112名、男子バスケットボール部64名、女子バスケットボール部25名、女子バレーボール部10名)であった。学年の内訳については、1年生79名、2年生56名、3年生47名、4年生29名であった。今年度の安全講習会については、前述したように、各部のアスレチックトレーナーが中心となって、状況に合わせて適宜行われた。

以下にアンケート調査の結果及び考察について記す。アスリートの学生が年々増加している状況の中、アスリート学生に、講習会を通じて、日頃の活動を安全に行えるようにするために必要な知識を得ること、また、競技力向上のために知識を得ることの必要性と重要性を感じ取ってもらえたらと考えて、質問内容を作成した。アンケート作成に際し、1)~4)は、今回行われた安全講習会の振り返りを行い、アスリート学生の講習会に参加する態度や興味などの実態を知ることが目的として行い、また、5)6)については、将来的に学生たちがどのようなことに興味を感じているのかについて調査することを目的として行われた。

年々増えるアスリート学生に対して、アスリートとしての指導を強化部のスタッフに委ねられているが、学生としての指導は、多角的に行われるべきであると考えられる。アスリートセンターが主催する講習会をきっかけに、知的好奇心を引き出し、多くの時間を競技に費やしているアスリート学生達に様々な観点から物事を知り、考えさせることは重要なことである。

アンケート調査の結果を以下に示す。

問1の「積極的に参加することができましたか?」という質問に対して、非常にそう思う(140名)、そう思う(66名)、どちらとも言えない(5名)、あまりそう思わない(0名)、全く思わない(0名)という結果となった(図6)。

Q1. 積極的に参加することができましたか?

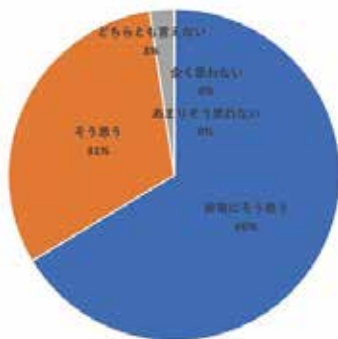


図6

「非常にそう思う」「そう思う」が全体の97%を占めていたが、「どちらとも言えない」と答えた学生が3%を占めていた。各都で行われた講習会であったことから、自分の行っている活動との接点を感じやすい状況であったと考えられるので、個別にアプローチをすることにより、今後、日頃の授業などに波及させることができるのではないかと考えられる。

次に、問2の「安全講習会によって新たな知識や考えを得ることができましたか?」という質問に対しては、非常にそう思う(137名)、そう思う(71名)、どちらとも言えない(3名)、あまりそう思わない(0名)、全く思わない(0名)という結果となった(図7)。

安全講習会は毎年アスリートセンター主催で行われているが、各強化部のスタッフの協力により、新たなコンテンツを加えるなど講習会に工夫がみられたことから、「非常にそう思う」「そう思う」と答えた学生が、99%を占めたのではないかと考えられる。これらの結果より、アスリートセンターの取り組みとして、学生達が興味を持って参加できるように講習会などの工夫をしていくことがアスリート教育に重大な影響を与えるものと考えられる。

Q2. 安全講習会によって新たな知識や考えを得ることができましたか?

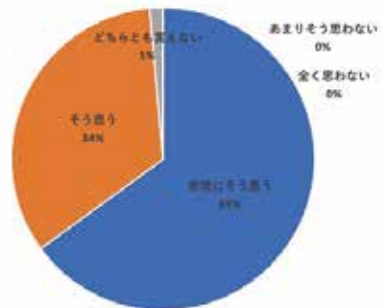


図7

問3の「安全に関する知識を持つことはアスリートとして必要だと思いますか?」という質問に対して、「非常にそう思う」(175名)、「そう思う」(33名)、「どちらとも言えない」(3名)、「あまりそう思わない」(0名)、「全く思わない」(0名)という結果となった(図8)。安全に関する知識の重要性は、アスリートとして活動していく上で基礎となる知識だと考えられるが、「そう思う」「どちらとも言えない」と答えた学生が、17%を占めていた。アスリートセンターの今後の課題として、自分自身、チームメイトを守るための行動をするために必要不可欠な知識を得ることの重要性を伝え、必要な時に自ら判断して行動できる学生を育成していく必要があると考えられる。



Q3安全に関する知識を持つことはアスリートとして必要だと思いますか？

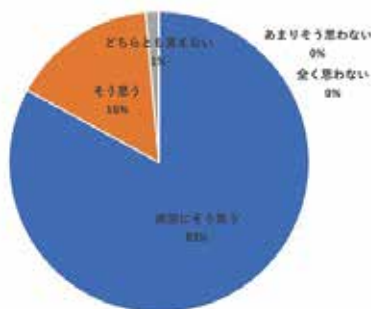


図8

問4の「今回の講習会で最も印象に残っている内容を教えてください」という質問に対しては、「AEDの使い方」、「熱中症対策」が多く挙げられていたが、「コロナ対策」というのも挙げられていた。今年度は、コロナの影響によりスポーツ活動ができない時間が長く、アスリート学生にとっては、スポーツの価値や意義を考えさせられる時間となった。怪我からの離脱などを除いて、スポーツ活動がこれほど長い間制限される経験は今まで皆無だったため、復帰に向けての調整なども各所で工夫がなされた。

問5の「アスリートとして競技を実際に行うこと以外に他の知識を得ることは必要だと思いますか？」という問いに対して、「非常にそう思う」(150名)、「そう思う」(56名)、「どちらとも言えない」(5名)、「あまりそう思わない」(0名)、「全く思わない」(0名)という結果となった(図9)。「非常にそう思う」と「そう思う」と答えた学生が、全体の98%を占めており、他の知識を得ることの重要性は認識しているものと考えられた。この背景には、大学生になると、高校生までの競技生活とは異なり、自分の自由に使える時間も増え、競技のこと、将来のことなどについて考える時間を持てるようになる。具体的には競技選手として社会に出ていくのか、公務員や一般企業に就職し社会に出ていくのかという現実に直面する。実際に将来スポーツで就職し生活していくのはごく少数の限られた人間であることを知り、客観的に自己を認識するようになる。そのような中、学

習することの必要性は感じているのではないかと考えられる。学生達が感じている学習の重要性をどう行動につなげていくかということがアスリート学生への教育の鍵になるものだと考えられる。では、具体的にはどのような知識を学びたいとアスリート学生は思っているのか？今後の安全講習会の中で、学生たちにもう一步踏み込んで調査してみることが重要だろう。それは、アスリートセンターとしても本学に入学してきたアスリート学生が、卒業後どのような社会に出ていきたいのか、またどのような就職先に送り出しているのかを議論していく上で重要なことであると考えられる。

Q5. アスリートとして競技を実際に行うこと以外に、他の知識を得ることは必要だと思いますか？

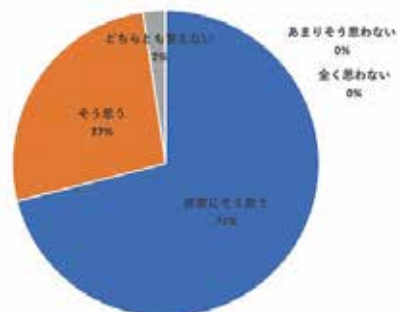


図9

最後に、問6の「今後どのような講習会を受けたいですか？」という質問に対して、下記の選択肢の中から興味あるもの全てを選択してもらった。

- ・運動整理学
- ・体力学
- ・トレーニング科学
- ・スポーツコンディショニング
- ・スポーツ医学(スポーツで起こる怪我・病気・リハビリテーションなど)
- ・スポーツ心理学
- ・スポーツ栄養学
- ・リーダーシップとフォロワーシップ
- ・モチベーションマネジメント
- ・コミュニケーションスキル
- ・目標設定のスキル
- ・チームビルディング
- ・スポーツコーチング
- ・トレーニング計画立案
- ・スポーツ戦術・戦略の分析
- ・スポーツ技術の学習過程
- ・チームマネジメント
- ・メンタルトレーニング

その結果、多かった項目の順に並べていくと、1位がスポーツ栄養学（35名16.6%）、2位スポーツコンディショニング（31名14.7%）、3位スポーツ戦術・戦略の分析（23名10.9%）、4位スポーツ心理学（19名9%）、5位トレーニング科学（16名7.6%）、6位スポーツコーチング（15名7.1%）、7位チームマネジメント（14名6.6%）、8位スポーツ医学（13名6.2%）、9位体力学（11名5.2%）10位コミュニケーションスキル（7名3.3%）という結果となった。1位から5位までは、競技者として競技力向上のために必要なことを学びたいということであると想像できる。本学では、スポーツの関連科目がカリキュラムに多くはない。それも本学では学科の特色から経営社会学科と現代社会学科にスポーツ関連の科目が集中している。しかし、年々増え続けるアスリート学生の所属学科も前途の2学科に占める割合は多いものの、多学科に所属するアスリート学生も現実的には存在する。そういった学生の学びへの意欲を低下させないためには大学全体としてのカリキュラムの在り方についても、今後アスリートセンターが主体となり考え、提案していく必要があると思う。

#### 参考文献

- 1) MYER GD, FAIGENBAUM AD, CHERNY CE, et al. Did the NFL Lockout Expose the Achilles Heel of Competitive Sports?. *Journal of Orthopaedic and Sports Physical Therapy*. 41 (10): 702-705, 2011.
- 2) Hess D. The NBA Lockout Has Increased Injury Rates. *Team Rankings*. 2012.
- 3) Mujika I and Padilla S. Detraining: loss of training-induced physiological and performance adaptations. Part I: short term insufficient training stimulus. *Sports Med*. Aug; 30 (2) : 79-87, 2000.
- 4) Soligard T, Schweltnus M, Alonso J-M, et al. How much is too much? (Part 1) International Olympic Committee consensus statement on load in sport and risk of injury. *Br J Sports Med*. 50: 1030-1041, 2016.
- 5) Takashi Naito, Hiroyuki Sagayama, Nobuhiko Akazawa, Miki Haramura, Masahiro Tasaki, Hideyuki Takahashi. Ice slurry ingestion during break times attenuates the increases of core temperature in a simulation of physical demand of match-play tennis in the heat. *Temperature (Austin)*. 5: 371-379, 2018.
- 6) Holmberg M et al. Effect of bystander cardiopulmonary resuscitation in out-of-hospital cardiac arrest patients in Sweden. *Resuscitation* 47: 59-70, 2000.